

芥川だより

発行日 * 2026年2月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

私は死なない



家内の葬儀はお坊さん無しの自然葬で行った。家族葬のため十人余りで遠方の親戚筋には知らせず、後日、はがきにてお知らせをする。すすり泣く娘たちを前にして読経の代わりに私が話をした。

「家内は、死んで茶毘に付され私たちの前から消えていくように思われますが、実は分子や原子と言った目に見えない小さな粒子に形を変えて私たちの周りを浮遊し体内にも入ってきます。見ることは出来ませんが、見えなくても家内から分解された粒子が周りにいっぱい浮遊しだす

のです。目に見えない、触ることも出来ない形に変化するの死だと私は考えています。粒子に人間と同じような意識があるかはわかりませんが、何らかの意思はあると考えます。この世の中には目に見えない物がいっぱいあって、今だに、一部しか解明されていない。」

私は、山での遭難事故や全身麻酔の手術などの経験から、他人は死ぬが、私は死なないと想像するようになりました。人が死ぬときは、脳神経が心臓を止める電気信号を送り心臓が止まります。人間の体は実に見事なシステムを持ち、死の苦しみを感じさせないように出来ていると私は感じています。話が飛躍しますが、私の死を私は知ることが出来ない。なぜなら、死の前に脳神経が止まってしまうから。全身麻酔をするとあっという間に無意識になります。

少し、話が飛躍しますが私は独り突然生まれ、あれこれの人生ドラマを経験し楽しんで独りで死んでいくが、私が死ぬことを私が意識できない、という事は「他人の死はあっても、自分の死はない」というとんでもない結論を得るのです。もっと大きく言えば、「世界の王は私なんだ」ということになります。私の意識がこの世を支配している。私が、見ている世界は幻か夢かも知れない。私が意識がある限り世界はあるが、私の意識が無くなれば世界も消える。

死をめぐるあれやこれ (133)

石川 吾郎

京都の自転車けもの道

京都御所の御苑の広い通路には砂利が敷き詰められている。ここに地面がむき出しになった細い小道が幾筋も走っている。これは、われわれ京都の住人が自転車で御所を横断するときに通るのだ。◆自転車で砂利道を走ってみればわかるが、小砂利を跳ね飛ばしたりしてひどく走りづらい。そして走ってきたのを振り返るとかすかに跡がついている。次に自転車で走る人は、前の人が通った跡をたどると、そこだけちょっと砂利が少なく、少しだけ走りやすくなっている。こうして何回も繰り返し走れば、砂利が跳ね飛ばされて走りやすくなった自転車のけもの道が出来上がる。◆この原理は、工学では「ポジティブフィードバック」と呼ばれる。この逆の「ネガティブフィードバック」による制御は状態を一定に保つ作用をして、ヒーターなどで利用されている。これに対してポジティブフィードバックの行きつく先は、破局である。現代の文明社会、特にAIの発達に、この類似を見るのは私だけだろうか。◆なお御所の自転車のけもの道は、ときどき管理する宮内庁の職員が砂利をまいて、ガラガラポンとすっかり消し去ってしまう。これも何やら暗示的である。

芥川だより二九号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム133	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 143	坂本一光	2
哲学者の時事放談 92	祖蔵哲	3
ボケ老人の雑話 23	明石幸次郎	7
オクラの山たより 113	因了生	8
隠された歴史 88	満田正賢	11
俳句	影山武司	12
編集後記	S K生	13
ふみの道草 91	山椒魚	14

素老人☆よもだ帳 (143)

◆「人類生活者」としての原点

生活教育学者・溝上泰子（みぞうえ・やすこ）のインタビュ記事「黙ってはいられない」を読んだ（一九八六年十二月二十八日付「赤旗」）。

一九八六年のインタビュとは、何を

今頃？ と思うかもしれない。昨年、住んでいるマンションの改修がありベランダを片付けざるを得なくなった。十五年前に引越して持ち込んだ段ボール箱が山積みそのまま、片っ端から開けては捨てていった。中には、二十六年に及ぶ単身赴任生活で、ほぼ毎週のように松江から大阪に帰省した国鉄と後のJRの特急券・乗車券の片割れが山の様であった。推定一千数百万円の交通費の残骸である。あれで家が建ったなあ、といまさらに思うけれど、祭りはいつも後からやって来る。

新聞の切り抜きもたくさんあった。その一つで、溝上泰子に出会った。彼女は、インタビュの二年前、一九八四年四月に私が赴任した教員養成学部元教授（一九五一一一九六七年在籍。大学で初の女性教授）であった。彼女の退官の十七年後に赴任した私に、彼女のことを語る人は誰もいなかった。

インタビュの紹介に、

「みぞうえ・やすこさん。一九〇三年広島県生まれ。奈良女高師（現奈良女子大）、東京文理科大（現筑波大）、京大大学院で学び、島根大学教授を長く務める。同大時代に山陰地方の農村主婦らに取材したルポルタージュ「日本の底辺」（五十八年）は『底辺ブーム』のさきがけとなる。著書は「受難島の人々」、「生活者の思想」など多数で、現在「人類生活者・溝上泰子著作集」全十五巻（影書房）を

刊行中」とある。

実は、切り抜いていながら不思議なことだが、同じ職場の大先輩のことでありながら、この記事は私の記憶から完全に欠落していた。インタビュ記事を改めて読んで、まずはつとしたことがある。それは、紹介にある「底辺ブーム」の影響が、おそらく京都大学・立命館大学における学生セツルメントサークル「底辺問題研究会」の発足・命名に及んでいることである。そのサークルに私も所属していたのだ。

もう一つは、取材を受けた山陰地方の農村主婦の一人に、大学を去ってから私が所属することとなった番傘川柳本社のかつての同人・笹本英子がいた事である。インタビュを読んだ少し前に、なんの暗号か、「番傘」誌上で笹本英子の存在を知り、彼女を『日本の底辺』に取り上げ紹介した溝上泰子を知った。その時こんなメモを書いていた。

「不勉強な失礼者の言い草だが、番傘誌を拾い読みしていると思わぬ収穫があり、教えられる事多々である。二〇二四年七月号の番傘誌八十一頁。磯野いさむ『遺稿集』No. 3の記事「水府忌におもいうー晩年の作品について」にこんな記載があった。（水府とは、百二十年に及ぶ歴史を有する番傘川柳本社を大阪に創設、支え続けた岸本水府のことである。素老人注）

はじめに、「治ることを信じて、水府さんの病院ベッドで、作句、選評、執筆に打ち込まれるすがたに、命の尊さを感じた」と述べ、水府の病床作品が紹介されている。

続いて「この病床で、水府さんは頼まれている句集の序文を書いている」とあった。その一冊が笹本英子の「土」で、「英子さんのことはかつて、島根大学教授・溝上泰子さんの筆で『日本の底辺』誌上に、一婦人としてとりあげられた」とある。私のかつての職場の大先輩の著書「日本の底辺」の古書を探し出し、教授と島根県の農家に嫁いだ英子さんの交流を知ることができたのも番傘誌のお陰であった」

さて、溝上泰子のインタビュは以下のとおりである。

「インタビュ 黙ってはいられない われわれが師範学校に入ったときに、地理なんか習うのにね、いまのような地球儀もありましたよ。だけど、それと自分とつながらないんですよ。テレビみたいなものもありませんしね。よその国といったら、地図の中にある。イギリス、いったら左側の上の方で、アメリカ、いったら右の方で、オーストラリアといったら下の方だ。そういう意識しなかったんですよ。 やっぱ人類というのは、十八世紀以来、概念だったんですよ。哲学者のと

ころが、いまは概念じゃないんですよ。具体的には、われわれなんです。目と鼻と口とあってね。

「眼横鼻直」という言葉、知ってますか。今日はね、もう皮膚や毛髪の色の違いではないんですよ。まさに、歴史的、地球的に生きていくわれわれなんです。概念が肉体化してきたのが、「いま」なんです。それは、われわれの日常性が、地球的・宇宙的になったからです。ここに私が、「人類生活者」といつている原点があるんです。

ところが、藤尾文相(当時)の韓国併合発言、中曽根首相の人種差別発言、それから金丸副総理の「姻戚関係があるから、竹下が首相になることを願う」という発言があったでしょ。あ然としました。悲しいことです。これが、われわれが一票入れた政治家なんです。

※ ※
本当に人間というのは、何民族とか、どこの国だとか、そんなことはゆうておられんですね。いま、絶対に。核爆弾がポツと爆発したら、ペアでしょ。

本当に言いたいことは、このこととね。生まれた以上は一人の人間として人類全体に通じる人間にならなきゃならない、ということ。

地球上の人類みんな「眼横鼻直」ですよ。眼がたてになつて、鼻が横になつたらそれこそ「新人類」といつてもいいでしょうけど、軽々しい新語にふりまわさ

れないでほしい。いい加減な言葉を作るな、といたい。皮膚の色や貧富、地球上のどこで生まれ出たかで、もう絶対に差別はできない時点で人類の歴史は至っているのですね。

天皇も国王も生まれて、育てられて、そして大人になつてね。家族をもつて、子どもをうんで、ときには病気をしたり、ケガしたり。そしてだんだん老いて、死んでいく。この一点は、私も天皇も、どつこもちがわくない。これが、教育されていないんです。本当ですよ。そこがね、教育すべきことじゃないか、と思うんですね。

わずかばかりの金もったり、物もったりして、楽チンしている人が多いですけどねえ、いろんな差別や貧困、これは人間が作り出したんですよ。だから、なくすことのできるのも人間。みんなが、一生涯かかって、なくそうと努力する。生きる」ということは、こういうことじゃないですか。

※ ※
生まれてきたからには、本当の自分は、何だろう。

「溝上泰子」は、地球上に二人といないんだ、この「溝上泰子」が、本当の「溝上泰子」になるには、どうするかということ以外にないと思うんですよ。

「自分が自分を生きる」ということは、絶対にエゴじゃない。おたがいが生きていく、ということだね。支えあつてこそ、

生きられるんじゃないですか。そこが、教育されてない。自分の体を自分でコントロールすることを教えていない。六十兆の細胞の主(あるじ)になる自覚、生きる意欲ですね。

読み書きを習うだけが、教育じゃないでしょ。一瞬一瞬、いかに生きるか、ということじゃないんですか。いまの教育には日常性が落ちていくんですね。私は人類史の立場から日常生活が問われていると思うんですよ。「生活即学習・学習即生活」は私の生きる原点です。

たゆまざる 歩みおそろし
かたつむり
これです。」

インタビュ어의最後の「これです」が指す言葉は、正しく川柳である。このインタビュールから四十年が過ぎてなお、「黙つてはられない」と思うことはこの世界に増えることはあつても減ることはなかつたように思える。

生きたらこういふことか蝸牛
この精神を持ち続けられるかに、われわれの未来はかかっていると改めて思うこの頃である。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(92)

祖蔵 哲

去年25年、年初1月の最大話題は20日のトランプ政権の再登場だった。その一年後、今年1月3日の最大ニュースもトランプ関連。突然ベネズエラに軍事攻撃、マドウロ大統領を不法に拘束し裁判にかけた。同じ人物がその年を象徴する事件にかかわっている。そして14日イランで起きた体制批判デモにもトランプは介入している。また米国内では連邦移民当局(ICE)が直近一ヶ月で市民二人を射殺。全米規模の抗議運動に発展した。トランプ大統領は正当防衛に基づく対応との考えを示しており、当局側の対応を擁護している。まったく常軌を逸した予測のつかない行動にかかわらずもう世界は慣れてしまっている。そして日本、今月はこれまた予想だになかった衆議院の解散総選挙。トランプの横で跳ね喜びしたお陰かそっくりになってきた。投票日は1月8日。予想では自民党与党は維新と合わせて300議席を超えるそう。その原因が最大野党である立憲民主党がこともあろうに元与党の公明党と野合したことだ。それが1月16日であり、選挙の直前であった。選挙はまず党名の衆知が最重要である。だから選挙前になると連呼するわけだ。直前の改名に有権者は戸惑う。さらに最近はマスメディア

を見ない層が増えている。そんな状況のなかで分かりやすい高市氏が支持されるのだ。そして多党化と全体の右傾化。日本もアメリカを追いかけて迷路に迷い込んでいます。さて、8日の選挙結果はまだ本稿執筆現在ではわからない。そこで締め切りをぎりぎりには伸ばしてもらい本稿の最後で選挙結果に少し触れよう。

さて、政党の多党化と右傾化は日本だけでなくヨーロッパでも同じである。アメリカでは依然として二大政党体制であるが、それぞれの党の中での意見は分かれている。そして世界の政治情勢は反知性主義とポピュリズムが席卷しているように見える。今月は「反知性主義」というキーワードから「人間の理性」の在り方を哲学してみよう。

(1) 反知性主義とは

現在使われている「反知性主義」の意味は「知性の否定」という意味で使われている感がある。それは知的エリートや、その象徴としてのマスメディアに対する庶民の反発として現れている。彼らはSNSなどの大衆空間こそが真実を作ると信じている。知識はディープリステート(闇の政府)が裏で操っていると陰謀論である。このような「反知性」という解釈は本来の「反知性主義」ではない。確かにアメリカでは、トランプに煽動されたこの主義者が大学や学者に圧力をかけ

たりしている。また、逆に知識人からは「反知性主義者」は学問を嫌うバカだというレッテルを貼る人も出ている。

歴史を調べてみると、この言葉はアメリカがイギリスから独立したきっかけとなったピューリタンの反イギリス国教会運動から来ているらしい。つまり、国王の離婚問題でカソリックから離脱した英国教会が聖書の教義解釈を国家の権威と結びつけたことに対する大衆の反発運動であった。知性とは権威、権力のことであり、「反知性主義」とは「反権力」のことであった。この後、米国では逆にそのピューリタンが教会の多数を支配するようになり、国ではなく聖書そのものが権威になる。これが「福音主義」である。

彼らは教会からも離れ幅広く大衆への「伝道」に重点を置くようになる。この「伝道」は当時現れた最新メディアであるラジオ、テレビなどによりアメリカ全土へ広がった。そして「伝道師」は大衆を煽動する技術を競いあった。これが現代の「ポピュリズム」へもつながっている。この「ポピュリズム」は20世紀から現在に至り、教育は普及したが格差は残るオルテガなどが言う「大衆社会の成立」後、「平均的人間の支配」と「専門家による統治」の緊張はますます高まっている。これに乗じて漁夫の利を得ているのが現代のトランプ政権である。

このように、「反知性主義」や「ポピュリズム」の本来の意義は「反権力」「反権威」だったのである。

(2) 「反知性主義」の起源「啓蒙主義」

前項で、「アメリカ独立」での反知性主義はイギリス国教会の権威への反発であるといったが、実はそのヨーロッパ大陸でも当時の封建領主や皇帝の長く続いた権威に対する反発が高まっていた。その抵抗思想が「啓蒙主義」である。

啓蒙とは17世紀から18世紀に広がった思想運動である。それ以前の西欧社会は封建主義社会であり、王・領主・騎士・農民が身分的に固定されていた。権力は「血統」と「土地」に基づき、知識はこの権力が独占していた。そしてキリスト教もかりで権力と結びついていた。「王の権力は神から与えられた」という王権神授説はその典型である。その後、ルネサンスという人間中心主義の文芸復興から次第に人間思想の開放に向かい「理性を使えば人間社会はより良くなる」という信念のもとこの「啓蒙思想」は広まっていく。

「社会契約論」でJ・ロックは抵抗権を、「法の本質」のモンテスキューは専制政治を批判、ルソーは一般意志に基づいた「人民主権」の正当性を主張した。

しかし、この啓蒙思想、封建社会で「理性の光」を持たない人々(未成年状態)に対し、知識という光を与える「啓蒙」、つまり、無知からの解放という上から目

線の思想であるとの受け取りもあった。さらにその理性万能主義への批判、伝統・宗教・感情の軽視など、当時発達段階であった科学技術一辺倒への傾斜も非難された。そしてこの行き過ぎた思想の反動で「ロマン主義」という感情・民族・歴史・個性の重視の思想が現れた。歴史はちょうど「フランス革命」から王政復古の時代にあたる。このように「反知性主義」は「啓蒙主義」という「理性中心」の反動で生まれた「感性中心」のある意味人間的な「ロマン主義」に移行していったのである。

(3) 「理性と感性」のねじれた暴走

絶対王権時代は個々の人々は素朴な感性的人間のままだに置かれていた。そして歴史は「啓蒙主義」理性中心から「ロマン主義」感性中心へ流れた。つまり「感性」から「理性」へ、そしてまた「感性」に戻ったのである。歴史は「感性」理性の間を両極へ振れながら進んでいくのであろうか。果たして、19世紀末になると人類ははじめての「世界戦争」の時代に入る。この時代はいわば、理性と感性が複雑に絡みあった時代である。

理性主義は普遍・国家・法・合理性。感性主義は個別性・民族・情念・内面とそれぞれ分類できる。この解釈で言えば、第一次世界大戦は理性と感性が対立したまま「国家」や「民族」に吸収されてし

まったのである。理性は科学技術・官僚組織として軍事に使われ、感性は民族主義・名誉・犠牲として挙国一致、煽動に使われた。つまり理性の勝利でも、感性の勝利でもなく、理性と感性が統制されないまま結びついた破局の時代に流れたと理解できる。

さらに第二次世界大戦に入ると一段と深刻になる。それは理性が「目的を失った」状態になったからである。ナチズムや全体主義は、感情的に見えるが、実はとても合理的・計画的だ。官僚制や科学技術、統計に基づいた世論操作プロパガンダは啓蒙主義的な「理性の道具」である。理性が「何のために使われるのか」という倫理を失っているが、ここではもはや「理性」≠「感性」ではなく手段としての理性が、暴力的な目的に奉仕してしまっただけという段階に入っているのである。アウシュヴィッツは「非合理の産物」ではなく、冷徹に合理化された地獄であった。

そして戦後、世界協調体制の復活として国際連盟が構築され、再び理性への信頼が取り戻されるが、それは束の間、東西冷戦体制時代になり再び世界は理性への不信になり複雑な時代へと進む。思想的にはポストモダン、相対主義が登場し「大きな物語」への懐疑、進歩史観・啓蒙への疑念、「理性」への強い不信が出てくる。

しかし民主主義、法の支配、科学技術、

国際秩序などは理性なしには成立しない。つまり戦後とは、理性は信用できない、でも理性なしでは生きられないという、宙ぶりの状態なのである。

では、私たちは今後どう「理性と感性」を使うべきなのか。キーワードは「自己反省する理性」である。時代を一言で言えば、反省を内包した理性の時代である。ハーバースマスなどが提唱した「対話型理性」は象徴的である。理性は万能ではない、だからこそ、対話・合意・批判に開かれていなければならないというものがある。システムや権力による支配ではなく、言語による相互理解を重視し、公共空間での討議を通じた真の民主主義の再生を目指す概念である。

(4) カント「啓蒙とは何か」に還る

感性は人間に生まれながらに備わっているように思われる、しかし理性はどうだろう。この理性をどう使えばよいのかを哲学として考えたのが「啓蒙主義」のカントである。時代はフランス革命が西欧の国家体制に影響を与えだしたころ、プロイセンは、フリードリヒ2世のもと「君主は国家第一の僕」という理念に基づき啓蒙専制主義を展開していた。カントは「啓蒙とは何か」という懸賞論文に応募した。そこでカントは言う。「啓蒙とは、人間が「自ら招いた未成年状態」から抜け出ることである。」と。ここでいう

「未成年状態」とは、自分の頭で考えず権威・慣習・他人の判断に依存し「言われた通り」に生きる状態を指す。重要なのは、それが能力不足ではなく「勇気の欠如」によるものだ、とカントが言っている点である。啓蒙の核心は「自らの理性を用いる勇気をもて」である。なぜ人は未成年状態にとどまるのか理由は二つある。一つは「怠惰」、自分で考えるのは面倒。そして「臆病」、考えた結果、責任を負うのが怖い。そこにつけ込むのが、宗教的権威や国家権力、専門家や指導者。彼らは「考えなくていい」と人々を導くことで、支配を維持する。

ここまででカントは「自分で自分の理性を使え」という。次に理性をどう使うのかを説く。それが、この論文で最も有名な区別、理性の「公的使用」と「私的使用」である。

「公的使用」とは学者・市民として、理性を自由に使い、公開の場で議論すること。これには完全な自由が必要である。

一方で「私的使用」とは社会的役割（軍人、官吏、牧師など）として職務を遂行する際の理性のこと。これには、一定の制限は許される。カントは「秩序を保つため、私的使用の制限はやむを得ない」としつつも、公的使用の自由が保障される限り、社会は必ず啓蒙へ進むと考えた。

カントは急進的なフランス革命には懐疑的であった。その理由は、革命は支配者を変えるだけで人々の「考え方」まで

は変えられない、というもの。啓蒙とは、法律や制度の改革よりも、それは時間をかけて斬新的に進める思考の仕方の改革と考えていた。

(5) 理性の条件の崩壊

カントの理性が前提としていた理想的世界の条件は四つある。まず、そもそも「理性」は「普遍性」を志向するものであるという。一つの民族や国家でなく全世界的な目的を目指すものである。そしてそれを目指す手段としての理性は「自律的」な個人主体によって行使されるものである。さらにその理性は複数の個人により良い方向へ収斂する。最後に理性は最終的に「自由・道徳・平和」と親和的であるというものである。つまりカントは、「理性を自由に用いれば、人間はより善くなる」という弱いが確かな進歩史観をもっていたのである。

しかし、20世紀が突きつけた現実はこの前提を根こそぎ揺さぶった。理性は善を保証しない。理性による科学技術は大量殺戮兵器を生み出し、そして環境破壊をもたらしている。

これらは感情の暴走ではなく高度に合理化された計画と技術の産物であった。つまり、理性は「人間を解放する力」であると同時に、人間を効率よく殺す力にもなることが、疑いようなく示されたので

ある。

(6) 主体の崩壊：「自律的理性主体」は幻想だったのか

カントは、自律的責任を引き受け、公的討議に参加する個人主体の出現を想定していた。

しかし現代社会は、大衆社会、マスメディア、プロパガンダ官僚制によって、主体は分断され空洞化している。ハンナ・アーレントが指摘した「悪の凡庸さ」とは、自分で考えない、しかし理性的に「仕事」はこなす人間像であった。これは、カントが想定した「未成年状態からの脱却」が、制度的に再生産されうることを意味する。

カントは、自由な言論、公開討議があれば、理性はより良い結論へ近づくと考えた。

しかし20世紀は、イデオロギーの極化、宣伝と扇動、科学の政治利用（ヒトなど）によって、議論は分断を深め、理性は武器として使われることを示している。理性は合意を生む保証装置ではないし、議論は必ずしも収斂しない。これは公共的理性の破綻であろうか。

では、なぜ「破綻したように見えた」のか。カント的理性は、論理的に自己矛盾を起こしたわけでも、また哲学的に完全に否定されたわけでもないと言った。それでも「破綻した」と感じられたのは、

「理性⇨進歩⇨善」という期待が、歴史によって裏切られたからである。言い換えると、理性は残った、だが「理性に救済を期待する物語」が崩れたのである。

この反省から生まれたのが、ポストモダンの大きな物語への懐疑である。つまり20世紀後半は、理性を捨てるのではなく、理性を疑いながら使う時代に入る。

以上、20世紀においてカント的理性が破綻したように見えたのは、理性が悪を防ぐ保証にはならないことが、歴史的現実的に暴露されたからである。

(7) それでも我々は理性を捨てられるのか。

結論を先に言うと、我々が理性を捨てられないのは、理性が「真理」や「善」を保証するからではなく、理性以外に、暴力を使わずに対立を処理する手段が存在しないからである。

まず「理性を捨てる」とは何を意味するか。それは、論証よりも信念、討議よりも情動、普遍性よりも帰属、批判よりも服従が優位になる状態である。歴史的に見ると、この結果はナチズムや大日本帝国などですでに実証済みだ。神話・宗教的絶対性、民族的情念を目指しカリスマ的指導者を求める。これらは意味と結束を与えるが、異論を処理する方法を持たない。結果、異論は排除され、沈黙する。そして暴力でしか解決されなくなる。

つまり、理性を捨てるとは、「話し合いで解決する」という選択肢を捨てることだ。

理性は「正しい」から必要なのではない。カントは、理性は普遍的で、自由と道徳に向かうと期待した。しかし戦後の思考はこう言う。理性はしばしば誤る、理性はしばしば悪に奉仕すると。しかし、それでも理性を使うしかない。なぜなら、理性を使わない選択は誰かの力・信仰・感情に従う選択に必ずなるからだ。理性は最善の手段ではない。しかし最悪を避けるための唯一の手段である。

さらに重要なのは、理性は「最後の共通言語」であることだ。世界の国々は文化、宗教、歴史、慣習、感情表現など様々でそれぞれに価値観が違う。それを理解し共有可能にするのは理由を述べ、反論を聞き、修正するという「形式」だけである。理性とは、結論の中身ではなく対話のルールのである。

ポストモダンには、普遍性は幻想だ、客観性は権力だ、理性は支配の道具だといつて理性を批判した。しかし、ここに逆説がある。これらの主張はすべて、論拠を示し、他説を批判し、説得を試みるという理性的形式を使っている。理性を完全に捨てた批判は、批判として成立しない。理性は、自分自身を批判するために必要なのだ。「理性を疑う」ことも理性でしかできない。

さらに、理性なき正義は、必ず暴力になる。感性的「正義感」は理性よりも強

いエネルギーを持っている。「正しい歴史」「正しい民族」など理由を説明しない正義、異論を聞かない正義などは必ず暴走する。理性とは、正義にブレーキをかける装置でもある。

そして、これら感性和理性が衝突したとき、最終的に調停に出てくるのは理性しかない。

しかし、理性は王ではなく、裁判官なのである。

「追記：選挙結果を含め」

予想どおりである。いや予想以上か。自民党単独でも過半数の233議席を越え公示前議席から118増加し320議席に達している。反対に立憲、公明の中間は公示前から同じ数118議席へらして三分の一の49議席に激減している。本文でも述べたが、今回の選挙は本来の意味ではない「ポピュリズム」「反知性主義」のなかで行われた感情的な理念なき選択である。「高市さんは何となく働いてくれそうだ」という声が圧倒的だ。今や「未成年状態」にさせられている国民は「理性」を正しく使うよりも「感性」を「正しく」使つて分かれ道のない進路を選択させられた。それでも「理性」を信頼するの。段々自信がなくなってきた。この選挙でも見られるようにSNS時代が「公共的理性」を破壊しつくすのではないかと心配である。さらにAIやアルゴリズムは理性の延長か、放棄なの

かという難問もある。その根底には知性の資本家独占、操作があるのは確かであるが、考える私を考える理性そのものが誰かに乗っ取られているのではないかという不安もある。それでもやはり「理性」を信じよう。周囲の意見に合わせるのではなく、自分で考えて状況を判断できる人「自律的人間」になることが重要である。異なる視点で物事を評価し、客観的な証拠を重視し、批判的思考力を持つことが大切であると痛感する。

最後に本号の理解をさらに深める良書を紹介しよう。その本が最近発行された『考えるを考える―「思考の多様体モデル」の誕生』伊藤 明 著(東京図書出版)である。この本はまさしく、我々の理性がどのように私自身を含めた世界を知ることができているのかという「理性」の可能性の構造を解き明かした名著である。理性が考える過程に構造を見出し「思考の多様体モデル」を提供する。そして難しい多様体をやさしく解説。斬新なエッセイ論もわかりやすく解きほぐしてくれている。是非一読を。

ボケ老人の雑記(その23)

明石 幸次郎

「何が幸せなのか?何をすれば幸せになるのか?」

幸せな人に共通する因子が4つあると「幸福学」研究の第一人者である前野隆司さんは長年の研究の結果として言われています。

それは、①やってみよう因子(自己実現と成長の因子) 自分が主体的に行動する。

②ありがとう因子(つながりと感謝の因子) 周りの人に対する感謝の気持ち、他者に何か役立ちたい、社会に何か貢献したいという、利他の精神を持つ。

③何とかなる因子(前向きと楽観の因子) 大丈夫、まだ道はあると楽観的にとらえる。

④ありのまま因子 他人と比べず自分らしく生きる。自分の良さや、価値観を大事にし、本当に好きなことを追い求める、この4つの因子を満たせば幸福に繋がると言うのです。

先月のこの雑記(その19)で書きましたが、60歳代の女性が「物価が上がりが生活が苦しくて、今までやっていたことが何も出来なくなり、元の習い事の仲間が楽しくやっているのをSNSで見ると辛い、外に出ても、皆が笑いながら楽し

く買い物などをしている。それを見るのが嫌で余り外に出なくなつた。自分は経済的に苦しくなってきたが、他の人はどうやりくりしているのか?」と言って、他者は上手くやつてそうなのに自分だけが出来ないの惨めな気持ちになるといふ嘆きと、辛い気持ちの電話があつたことを書きました。

この電話の掛け手の女性には、記述の幸せな人の共通する4つの因子がどれも欠けているようです。相談員としては、相手のしんどい気持ちに寄り添い、共感することで、こちらが気の毒だと思つて、何か出来ることはないかと推測し、聞かれてもいないことを、善意のつもりで、援動的な言葉は控えるようにしています。

この人がその気になれば直ぐにでも出来ると思われ、幸せを実感できる4つの要因の①やってみようで、パートでもなんでも働いて少しでも収入を得て、今までやれていたことを実現出来るように主体的に行動することをしては? と思いましたが、それが出来ないのですね。なぜ出来ないのか?自分はパートなどしてまでお金を稼ぎたくないという自分のプライドが邪魔をして動けないのか、何か出来ないと言う壁を自分で作つてしまっているのか、それでは、せめて、ありのまま要因を持ち、他人と比べずに、自分は自分でお金をかけなくても自分らしく楽しめるものを見つけ、又、

他人の喜ばれるようなボランティア活動などをすることでありがとう要因を持てば、徐々にでも「幸せかなあ」と感じられる時が訪れるのでは? と思いがながら、何かこの人に響く言葉を発せられなかったかと、今も自分の心の中に何かひつかつた状態です。

同時に、20年前に出会った当時55歳のKさんという女性を思い出しました。私が55歳で、それまでの営業から工場にある子会社に転勤になり、Kさんはその子会社のパート従業員として働いていました。仕事は8時から12時までのトイレ、浴場などの清掃作業でした。小柄で良くしゃべるところにでもいる下町のおばちゃんという感じの人で、私が挨拶したら自分がここで働きたきつかけを話してくれました。二人の子供が社会人になり、大手銀行の支店長をしていた夫も定年退職した何年か後に、夫に猛反対されたが、どうしても社会に出て働きたいと思つていたところ、偶々見つけた「工場内の清掃の仕事で、パート募集50歳代女性」というチラシを見て、自分は専業主婦で家事しか出来なかつたが、その家事の延長として清掃の仕事ならば出来ると思ひ55歳で応募したところ採用された。採用された時は、これで自分も掃除という仕事を通じ社会との繋がりがもてると本当に嬉しかったと、それから10年間、工場と事務所内にある全てのトイレの掃除と、工場内の大浴場の掃除を8

時から、12時まで4時間。パートとして働いていた。時給は800円（最低賃金708円）位だったと思います。兎に角、皆が出勤する8時前から、働き出して事務所の階段、廊下、トイレの掃除をやり始め9時半ごろに終えて、それから一番手間暇がかかる10畳くらいある浴槽の掃除を終えて10時からの10分の休憩に風呂場にある自販機の缶コーヒーを飲むのがこの人のルーティンになっていました。

私は明るくキビキビ動き、汗をかきながら掃除しているKさんに興味を持ち、毎日、10時の休憩になれば、自販機の缶コーヒーを買って行き、休憩中のKさんと缶コーヒーを飲みながら雑談するのが楽しみになりました。

何日か経つとすっかり、私を信用してくれたのか、工場内の人間関係とか人物評価などの情報をKさんが公平な？立場から仕入れたものを、私が聞けば教えてくれて、それにより親会社の勤労業務課長以上の生情報を得るようになりました。それで子会社40名程の一癖も二癖もある現場の人事管理を、社内のいざこざ、労災もなく2年間は面白く出来ました。

そのKさんは、パートとしての与えられた仕事をただやるだけでなく、自分で工夫しながら、能率よく仕事をこなし、又、仕事だけではなく自分から企画して社内の人を集めて、休みの日には旅行に

行ったり、カラオケに行ったりして仲間と楽しく時間を過ごしていました。毎年5月の節句には柏餅を200個くらい作り、近所と人、仕事の仲間、私にも配ってくれて、皆に喜ばれていました。何かしら人を喜ばすことを積極的に行っていましたので、自然と人が寄って来て関係も良くなり、それで色々な情報も得られたのでしょうか。

Kさんは、幸福な人に共通する要因の①やってみよう要因と②ありがとう要因

(つながり感謝の要因)を感じさせるおぼちゃんでした。それだけではなく、

③何とかなる要因(前向きと、樂觀の要因)家族を大事にして、自分が稼いだ金で自分の好きな稽古事もやって、④のありのまま要因も持っていて、今から振り返っても、私が興味を持ち、引き付けられたのはKさんが幸せそうに感じられたから引き寄せられたんですね。幸せなそういう人には、人が寄って来て、そのことで又、人との繋がりを感じて幸せ感を深めるものなんでしょうか？今でもKさんが午前中で仕事を終えて、工場内を颯爽とママチャリに乗ってニコニコ笑いながら「明石さんお先に！ 昼からも、仕事さぼったらアカンよ！」とかなんとか冗談を言いながら帰って行く姿を想い浮かべます。ちなみにKさんは75歳まで機嫌よくパートで働いたと後輩から聞きました。

オクラの山たより(113)

困了生

一

前回に引き続き「大つごもり」をめぐる話題です。「大つごもり」がそれまでの一葉の小説に向かう立ち位置を大きく変えて、いわば現実を生きる女性たちの人生の中から人生の真実というべきものを見つけ出し、それを小説に書くこととした第一作であるという観点から前回では評価しました。しかし、「大つごもり」が持っている世界はそれだけにはとどまりません。何より「大つごもり」で大きな問題として書かれているのは金銭をめぐる問題だからです。今回はこのことについてふれつつもう一段広く「大つごもり」の世界を探っていきます。

すでに何度か記してきたように金銭の問題は十六歳で戸主となって以来ずっと一葉の頭を悩ませてきた問題でした。「大つごもり」を執筆していた頃は一段と苦しい状況になっていました。定収入といえるには萩の舎の助教が月に二円、「文学界」からの原稿料が数カ月に一度、数円ほど。これでは月十円を超す一家の出費にはまったく追いつきません。それで中島歌子には内々ですが自宅で弟子を取ることになりました。これは樋口家の窮乏ぶりを見かねた野々宮菊子などが生活援

助のつもりで和歌や古典について一葉の話を書くついでにわずかばかりの金を置くようにしていったのです。

一葉はそれに対して十分な講義をしたに違いありません。なぜなら徐々に弟子が増えて後には安井てつのような才媛も入門してきたからです。安井てつは一葉よりも二歳年上で女子高等師範を出てケンブリッジやオックスフォードにも留学経験があり、後には新渡戸稲造とともに女子教育のために東京女子大学を開き、新渡戸のあとに二代目学長になった人物です。その人が小学校中退の一葉に師事したのです。一葉の学識、恐るべしです。

蛇足ですが、昭和の初めに東京女子大学からは伊藤千代子をはじめとして共産党と関わりのある者から逮捕者が多く出ましたが、安井てつがキリスト教のヒューマニズムの立場から彼女たちをかばったことは記憶されてもいいことです。

話を元に戻して、自宅で弟子をとったとしても数名だけでは月十円を超す生活費をまかなうことは難しかったでしょう。とはいえ、萩の舎の中島歌子に釘をさされていたこともあって大々的に歌塾を開くわけもいきませんでした。となれば借金をするしかありません。借金を返すために借金をするといった自転車操業のような毎日が続きます。このころの日記には「かねての借り金催促の趣。五円ばかりなれども、いまは手もとは一銭もなし。難きをいかにせん」(明治二十八

年五月二日)、「『今日夕飯を終わりは、あとに一粒のたくはへもなし』といふ。母君しきりになげき、邦子さまさまにくどく……我とて更に思ひよる方もなし」

(明治二十八年五月十四日)という内容の記述が多く見られます。貧乏もここに極まった状況が書かれています。

こうした様子にもかかわらず明治二十八年五月七日に「文学界」の平田禿木と馬場孤蝶がはじめて上田敏をともなつて一葉を訪ねたときには寿司を取つて彼らに振舞つています。一葉の晩年に「文学界」の同人が次々と一葉の家を訪れ、一種のサロンが形成されていきました。「文学界」の同人たちが一葉に影響をずいぶんと与えたのは事実ですが、彼らが来れば一葉は姉のように振舞い、寿司や鰻を取つてもてなしました。この時代、うな重一人前は三十銭ほどでかけそばが一杯一銭五厘でしたから、その出費はかなりの負担になったはずで

家には一粒の米もなくなつたと嘆いた五月十四日に、たまたま萩の舎に寄つた際に中島歌子が今月分の助教代として二円を渡してくれました。しかし、昼にやつてきた客に昼食を出し、夜には妹の邦子と義太夫を聞きに行つています。江戸っ子は宵越しの金は持たないを地で行くような散財ぶりです。

二十四日には父が奉公した稲葉家の同僚であつた西村鉏之助から五円借りるとその翌日には邦子と寄席に行つていま

す。その翌日には「文学界」の同人が三人やつてきます。この時もうな重を取り寄せています。自分たちも食べたとしてばしめて一円五十銭。自暴自棄かと言われそうですが、一葉は日記で見ると支に對して無頓着であつたというほかはないのですが、せつかく得た金を巷にばらまくような金の使いぶりです。自暴自棄ともいえるような感じですが、日々の多忙さと病状の悪化とで金の計算どころではなかつたかもしれませんが、他にも理由があつたかも知れません。

二

さて、「大つごもり」の作品のポイントは金銭をめぐる問題と先ほど述べましたが、「大つごもり」の作品の構造のポイントはお峰が仕える山村家と伯父である安兵衛一家とが織りなす人間関係のありようを血の通わぬ流通手段にすぎない金銭の量に置き換え、そこからもう一つの新たな意味を引き出していく過程にあります。繰り返かえしになります、「大つごもり」のあらすじをふりかえつてみます。

金銭の劇として「大つごもり」を見ていくとその物語の始まりのきっかけは病気で苦しむお峰の伯父安兵衛が高利貸しから借りた十円の金です。この借金の返済を待ってもらうために安兵衛は大晦日までに利子の一円五十銭を手にしなけれ

ばなりません。また年を越すために五十銭の金も必要です。その金の調達の役割は小さい時から伯父夫婦に養育され今は山村家に下働きの女中として働いているお峰の肩にかかります。養育の義理と骨肉の情という枷があるお峰は、この伯父の依頼を引き受け山村家の御新造に二円の前借を申し出ることを約束します。

しかし、いったんはお峰の申し出を承知した御新造は、いつもは家をあけていることが多い継子の石之助が父親に金を無心するために帰宅したことに腹を立てて気が変わりお峰に金を渡そうとはしません。

娘の出産祝いのために外出した御新造と入れ替わりに伯父夫婦の子の三之助が現れたとき、御新造の冷たい対応を恨んだお峰は懸硯の中にあつた二十円の札束から二円を抜き取つて三之助に渡します。

山村家では大晦日の日に家の中にある現金に封印をする習慣があり、お峰は盗みが発覚するのはと恐れますが、意外なことに懸硯の中は空っぽで父親から五十円の金を巻き上げて家を出ていった石之助の受け取りが残されていました。受け取りには「引き出しの分も拝借致し候石之助」とありました。

窮地に陥つたお峰を救つた石之助は継母の御新造の冷たい仕打ちに「放蕩(のら)」を始めたことになっています。だが、石之助の放蕩は「品川へも足を向く

れど、騒ぎはその座限り」という程度のもので、明治半ばの頃の常識からいえば裕福な家の若旦那の放蕩といつても誠にささやかなものでした。そうしたことはなく両親が頭を抱えていたのは「夜中に車を飛ばして、車町(東京都渋谷区にあつた歓楽街)の破落戸(ころ)がもとをたき起こし、それ酒かへ肴と、紙入れの底をはたきて無理を徹(とお)す」という石之助の奇妙な道楽なのでした。

このような散財・浪費は「正直律儀」を表向きモットーにしている資産家山村家の蓄財こそ最高の特技とする論理に真っ向から挑戦する行為であり、貧しき人々と親しく交わっていることは山村家の家名に泥を塗り辱める重大な裏切り行為といえました。「去年にくらべて、長屋も増えたり、所得も倍」という実績に得々とする山村家の蓄財の論理は伊皿子(車町近所にある町で現在の港区芝伊皿子)あたりの貧乏人を喜ば「せるために正月の宴会を用意する石之助の贈与の論理によって侮辱され冷笑の対象とされます。石之助の浪費は「正直律儀」の表看板としつつ、その裏で弱者を抑圧して蓄財に励もうとする山村家の罪滅ぼしの代行をしているといえそうです。

もちろん、二円を盗んだお峰と残りの金をすべていただいた石之助の間にはひそかな共犯関係が生じます。この二人の犯罪行為で手に入れた金は「伊皿子あたりの貧乏人」を喜ばせる宴会の資金とな

恵に違いありません。

り、一方では借金に追い詰められた安兵衛一家のささやかな新年の祝いの資金にもなったでしょう。大晦日は生の抑圧ともいえる暗い冬の季節が終わる日であり、同時にそれからの解放とよみがえりをもたらす新春の到来が予期される日でもあります。庶民に重圧を与え苦しめる一部富裕層の論理である「蓄財・蓄積」から貧苦の人々に一時にせよ喜びを与える「散財・贈与」。大雑把な言い方で、**「蓄財・蓄積」**の論理を山村家に割り当て「散財・贈与」の論理をお峰と石之助に割り当てた「大つごもり」は金銭にまつわる抑圧と解放の物語であるともいえます。

三

「蓄財」の論理と**「浪費・贈与」**の論理の対立。徐々に進む資本主義の時代にあつて富裕な山村家はいわゆる**「勝ち組」**であり、その家の論理が**「蓄財」**と設定された一方で石之助の論理が**「浪費・贈与」**であつたのは作者一葉にどのような思いがあつたのでしょうか。そのあたりをもう少し考えてみます。

一葉が井原西鶴の文体や発想を意識的に取り入れて「大つごもり」を書いたことは多くの研究者の認めるところです。たとえば大晦日一日に焦点をあわせて事件を畳みかけていく構想も西鶴の「日本永代蔵」や「世間胸算用」から学んだ知

真山青果の伝えるところでは、一葉は「日本永代蔵」巻一の二代目に破る扇の風を愛読していたそうです。この二代目に破る扇の風」という話はケチを貫き蓄財に励んだ先代から二千貫目の遺産を譲り受けた二代目が、たまたま拾ひあつた封じ文の一分判を京の嶋原遊郭で使い捨てたことがきっかけで、四、五年の間に財産をすっかり使い尽くしてしまふ話です。この話は西鶴研究者によつて「蓄積と消費の相を文学的に、すなわち人間の抑圧と解放の相に集約して描いた作品」（暉峻康隆氏の言葉）とされています。「蓄積と消費の相」のもとに追究された金銭のありようは西鶴が繰り返し取り上げた作品のテーマでした。「大つごもり」とかぶる部分が見えます。

西鶴は蓄積・蓄財の論理を町人・商人の世界のタテマエとして描きましたが、武士の世界のタテマエは消費と贈与の論理であるとして作品を書いています。一例をあげれば「西鶴諸国はなし」の中にある「大晦日はあはぬ算用」です。

原田内助という浪人が親戚の医師から「貧病の妙薬、金用丸、よろづによし」と記した金を十両いただき、その喜びをわかとうと同じ浪人仲間を大晦日に七人招いて宴を張るといふのが物語の始まりです。その席上で内助は小判を皆に披露して皆に回覧させます。それが一巡したところで一両だけないことが判明しま

す。その場合は当然ながら白けてしまひます。浪人といえども武士ですから金銭による恥辱は死より重い意味をもちます。たまたま宴の始まる前から一両を懐に持つていた一人の浪人が不運を観念して身の証を立てるために腹を切ろうとしま

す。腹に刀を突きたてたその瞬間に行燈の陰から「小判はこれにあり」と声がかかつて小判が一枚投げ出されます。これがその場にいた誰かの機転であつたことはすぐ後に判明しますが、この意外な救済法も含めて「大晦日はあはぬ算用」という物語全体に流れているのは町人・商人の世界のタテマエとされる蓄財の論理の否定であり、その論理への無言の批判・侮辱です。金銭は贈与のために用いるものであり、何よりも情宜と信義の証

なのであつて、それ以外のものではないのです。筆者の感想ですが、幾分かではありますが一葉は武士の方に肩入れしているようです。さらに「大晦日はあはぬ算用」では誰かの機転で疑いをもたれた浪人は救われますが、「大つごもり」ではお峰を結果的に救うのは石之助です。そうした対応を他に求めていくと「大晦日はあはぬ算用」で問題となるのは十両と一両ですが、「大つごもり」では二十円と二円です。よく似ています。

西鶴の影響がみられるのはそれだけではありません。お峰の二円の盗みがあればそうになった時、「聞かれずば甲斐なし。

その場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ」という決意をするお峰の健気さも、一命を捨ててまで着服の汚名を晴らそうとした浪人（武士）の潔癖さをうつつしかえたもののようにみえます。

以上、「大つごもり」を金銭をめぐる物語であるという視点からみていくと西鶴とのかかわりも含めて新たな見方ができます。

なお、日本近代文学の研究者の前田愛によれば「贈与」ということについて、**「バタイユが「与えることが力を獲得することであり、蓄積された富の軽視によつて生の豊かさがもたらされる」といつているそうです。この言葉は近代の資本主義への批判となつていますが、「大つごもり」を「蓄財・蓄積」と「浪費・贈与」という点から見えていくとき、このバタイユの言葉はこの作品の新しい読み方を示してくれています。**

隠された歴史(88)

満田 正賢

前回は、『日本の歴史1. 飛鳥と奈良時代 第三巻 律令国家と万葉びと』(小学館)に収録されている鐘江(かねがえ)宏之氏の「朝鮮半島方式から中国方式へ」という論のポイントを①日本の木簡は朝鮮半島から伝わったものである②朝鮮半島の漢字用法の影響③大宝律令による朝鮮半島方式から中国方式への転換、という三点にまとめてご紹介しました。今回は、古田史学が提唱している七〇一年の王朝交代と朝鮮半島方式から中国方式の移行にはどのような関係性があるのか、その点を深く探っていきます。

まず、七〇一年の大宝律令による「評」から「郡」への移行は、朝鮮半島方式から中国方式の移行の一環として捉えられるという点です。「隠された歴史(4)」でご紹介しましたが、文献には出てきませんが評(ひょう・こほり)という制度があったことが各地で発掘された木簡などで確認されており、この「評制」が大化の改新(六四五年)で発令された地方行政制度ではないかというのが通説になっています。古田武彦氏は、「なぜ日本書紀は「評」を「郡」に変えたのか」という点に問題意識を持ち、「評制」の存在の隠蔽はその制度を産出した公権力の存在

そのものを隠すことである、とし、「評」は九州王朝の制度であったという考察に進みました。

私は、「隠された歴史(4)」の時点で、評制は朝鮮半島の制度が日本に持ち込まれたものであるという鐘江氏と同様の認識を持っていました。朝鮮半島に「評」という行政区画があったことは、高句麗の「内評」「外評」が北史や隋書に記されており、新羅の「琢評」が梁書に記されていることから明らかです。又、日本書紀の継体二十四年(五三〇)条には、任那に背評(せこほり)という地名の記述があります。

従来、古田史学では七〇一年の「評」から「郡」への移行を単独に考察してきました。「評」から「郡」への移行は、「コホリ」という地域行政制度に関する用字の変更と考えられますが、鐘江氏の考察のように朝鮮半島独自の文字の使用がなくなり、制度の変化、書式の変化も伴っていることから、「評」から「郡」への移行も、朝鮮半島方式から中国方式への転換の一環として捉えることが出来ると考えます。

しかし一方で、中国方式導入の一環として「大宝」という年号を「建元」したという鐘江氏の見解には同意できません。鐘江氏は大宝年号以前の九州年号の存在が眼中にありません。しかし、「隠された歴史(5)」などで何度もご紹介したよう

に、九州年号は一貫した年号として多くの書物に残っており、近畿王朝自体の系図の中にも残っています。従って大宝年号は近畿王朝が中国方式を取り入れた結果として捉えられるのではなく、やはり王朝交代の結果として捉えるべきと考えます。

また、なぜ日本書紀は朝鮮半島方式で記された歴史的事象を秘匿しているのでしょうか。大宝律令が単に朝鮮半島方式から中国方式への転換を成したのであれば、別に秘匿すべきことではありません。しかし、六四六年の改新之詔によって制定されたと思われる「評」は、鐘江氏自身が指摘しているように、日本書紀によって完全に秘匿され、その内容も大宝律令の条項を織り込むことによって、曖昧模糊とされています。これは何らかの意図があつて行われたとしか考えられません。

そして、中国方式への転換は「日本国」による遣唐使派遣の前に行われていることに注目する必要があります。「日本国」による最初の遣唐使派遣は、大宝律令制定直後の七〇二年です。従って粟田真人など「日本国」遣唐使のメンバーが唐の制度に感化されて大宝律令を制定したのではありません。むしろ、朝鮮方式を排除して中国方式の律令を制定したことも、「日本国」遣唐使の唐への報告の一つであつたと考えられます。そう考えると「倭国」から「日本国」

への国名変更と「朝鮮半島方式」から「中国方式」への転換は一体のものとして考える必要があるのではないのでしょうか。

私が「隠された歴史(8)」などで考察してきた後期九州王朝は百済と親密な関係を結んでいました。百済からの仏教伝来も、大和王権(実際には蘇我馬子が実権を握っていた欽明―敏達―推古王朝)ではなく九州王朝にもたらされたものです。一つの可能性として、九州王朝の官僚の中には相当数の百済人がいたのではないのでしょうか。その百済系官僚が漢字文化を日本に根付かせ、改新之詔の作成にたずさわったのではないのでしょうか。

「隠された歴史(60)」「(61)」などで考察しましたが、白村江の敗戦の後、中大兄(天智)の倭姫皇女(九州王朝の王女)との婚姻による、九州王朝からの政権奪取後、天武による九州王朝の天子(倭姫王・中宮天皇)の名目的な崇拜はあつたものの、日本書紀に記されていない九州王朝の百済系旧官僚の排除が進んだと考えられます。それが七〇一年の大宝律令の中国方式への劇的な転換によって、王朝交代を明確化したのではないのでしょうか。改新之詔の内容が曖昧模糊とされたのは、それが旧王朝によって作られたものであることを示していると考えられます。

ここで、前期難波宮と百済王室の関係について触れます。「百済王室と古代日本」

(大坪秀敏著 有斐閣 二〇〇八年)に次のような指摘があります。

「白雉元年二月条は、白雉出現に関するものであるが、ここに百済君豊璋、塞城、(禪廣)、忠勝が登場している。この白雉出現を機に白雉と改元されたのであるが、この改元を、孝徳天皇を中心とするグループの政治理念を示したセレモニーと解釈し、難波長柄豊碯宮遷都の主体を百済君豊璋、新羅人旻らによって推進したものと見なす説がある所からも窺える如く、厚く遇されていたものと思われる。」

「難波長柄豊碯宮の遺構が天武期まで存在し、それを改修及び補修し、再利用したものが朱鳥元年正月に焼失した前期難波宮に比定出来るとすると、難波の百済寺とされる堂ヶ芝廃寺と百済尼寺の位置が、俄かにクローズアップされることになる。即ち、四天王寺と同様、難波宮の朱雀大路と推定される中軸線に沿う位置に存在しているからである。」

「堂ヶ芝廃寺出土の四天王寺同范瓦が飛鳥後期のものであることは、孝徳期における整備と深い関係性を有していたことを示唆している。従って摂津の百済寺の創建が孝徳期であった可能性が高く、創建者を豊璋とその弟等とすべきではなからうか。しかも百済尼寺の発掘調査では、七世紀中葉の溝から四天王寺創建瓦と同范である素弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、その創建が七世紀中葉であったと考えられることは、百済寺の創建ときわめ

て深い関係にあったことを窺わせる。」

*大阪市天王寺区の細工谷遺跡から、「百済尼」などと墨書された土器と、堂ヶ芝遺跡から出土した瓦の同范瓦が出土しており、百済寺と百済尼寺を中心にした摂津百済郡が難波宮の朱雀大路と推定される中軸線に沿う位置に存在していることは間違いないと考えられます。

「天智朝は百済貴族官人層を日本の政治組織に編成し、その力量を吸収しようとしたのであるが、一方、旧百済王の禪廣ら一族を政治組織に編成することを回避する配慮が働いていたものと思われる。」

六四五年の乙巳の変は、中大兄皇子らによって蘇我入鹿が暗殺され、蘇我本宗家が滅亡したとされる事件です。そして、それをきっかけに孝徳天皇が即位し、前期難波宮(難波長柄豊碯宮)が造られ、いわゆる「大化改新」が行なわれたと日本書紀は記しています。私は、「隠された歴史(41)(46)」などにおいて、乙巳の変は、実際には九州王朝と近畿にいる九州王朝の支援勢力による蘇我本宗家からの権力奪還であると考察しました。そして乙巳の変直後の前期難波宮の建造・遷都、そして新しい国家統治の制度の構築(改新の詔)は互いに一体となった歴史的事業であると考察しました。百済君豊璋が前期難波宮の朱雀大路の中軸部分に百済寺、百済尼寺を創建し、百済

人の拠点を作っていたとするならば、後期九州王朝の中枢に百済人がいたことの証明になるのではないのでしょうか。

また、近畿勢力の渡来系氏族の系譜の造作についても触れておきます。近畿王朝の官僚となった東漢(やまとのあや)氏(*坂上田村麻呂はその直系)、西漢(かわちのあや)氏、秦氏など渡来系氏族は、いずれも朝鮮半島から渡来したにも拘わらず、新撰姓氏録には出自を「漢」と分類されています。「隠された歴史(81)」で触れましたが、彼らの出自は日本書紀には百済と記されていますが、実際には百済に支配される前の栄山江流域地域であったと考えられます。彼らは後期九州王朝の中枢にいた百済人と一線を画しています。ということは、彼らは改新之詔の作成に自分たちが関わっていないことを強調したのではないのでしょうか。彼らが出自を「漢」としたのは、「百済」ではないことを強調するとともに、近畿王朝による中国方式への転換の主体となったことを誇示したいという思惑もあったのではないのでしょうか。

俳句

影山 武司

大火鉢のぽつんとありぬ山の駅
寒菊や思ひ出を繰る数珠の玉
馬防柵一重二重に虎落笛
冬天の青に柵木の累々と
兵の声潜みある枯野かな
裸婦像の眼差じつと影冴ゆる
冬晴や甲斐の連峰青く澄み
ふるさとの訛丸出しおでん酒
新雪や小さき足跡はしやぎをり
光る海軍窓はみ出し春を待つ

◇14ページからの続きです。

しかし、

押し立てるムシロ旗なら持っている
そんな風景はどこにも見られなくなった。
あきらめムードの街に、

そのスマホ ムシロ旗にもなりますよ
といっても効果なし。一方で、
花も実もあつて根も葉もないスマホ

である。この国の人々は、選挙のたびにうんざりするほど踊らせ、踊らされ、踊っている。

赤紙がラインで来るぞスマホ族やがて正夢になるか。米の高値が続くがかつては、

瑞穂の国水より安い米づくりと言われた日本の米づくりは、どこへ行くのか。生産者が報われ、消費者が安心できる米の提供は、政治の責任である。一粒の米を見るとときにも、ふと思ふことがある。花も実も根も葉も水の美しさ

編集後記

S K 生

2月8日に総選挙がなされた。事前になされた多くの報道機関の調査の通りに自民党が単独で3分の2を超えて316議席を得た。大勝である。しかし、自民党の比例での得票率は36%であった。国民の3分の1程度の支持しかない。この事実をよく認識して政府がいたずらに暴走しないことを今は願うだけだ。一国民としては新たな政府が多くの課題を抱えるなかでこれから政府が出てくるものをじっと注視していきたい。

早春の花たち 京都府立植物園にて



ツバキ「雪中花」



プリムラ・オブコニカ



ランキンキュラス



スノー・ドロップ

五七五を読む ― 十七音の響き方⑦

悔いなしと結句が放つ人生譜 浜子

人生に悔いなしと結句が放つという
力強い一句に、むかしの映画と歌を思い
出した。

一九四六年公開の黒澤明監督「わが青春に悔なし」。一九八七年石原裕次郎最後の歌「わが人生に悔いなし」。映画は戦前の滝川事件やゾルゲ事件を材に、自我に目覚める女性を原節子が演じた。裕次郎は、「長かろうと短かろうと」、「右だろうと左だろうと」、「夢だろうと現実だろうと」と歌った。結句は「わが人生に悔いはない」。

花の種見詰めて夢をもらった手 菊江

手の中の種を見詰めながら、芽を出し、花を咲かせ、やがて散っては再び種を残す花の一生に思いを馳せ、人の人生を重ねる。別句「蒲公英の綿毛の旅を見送る眼」と対を成し、花から夢をもらったと詠う。

勇気づけ孫耳もどで頑張って 邦弘

八十路を越えてのガン治療を詠った六句。孫の言葉に励まされ、「患者らの明るい声に救われる」と気丈。くれぐれも自己愛を。

心地良い石橋を踏む下駄の音 みちる

「挨拶をするかしないか近所の目」を意識しながらの久しく絶えていた散歩。石橋を踏む下駄の音がこんなに心地良かったかと改めて実感。

尺取虫我が人生を真似てるね 智晴

「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり」(溝上泰子)である。尺取の歩みに我が生きる原点を見ながら、「おい、俺の人生を真似てるね」と詠うところがいかにも川柳だ。

犯行の一部始終を知るカメラ 南北

「付度」が盛んに言われた頃、無いなあと感じていた文書がポロっと出て来て、「天網恢恢疎にして漏らさず」を実感したことが何度もあった。今では街中に網目のように張り巡らされた防犯カメラが犯行を漏らさない。後ろめたいことをしていないけれど、桑原くわばら。

赤い糸月日がたつと茶に変わり 幸治

どんなに美しいものも月日とともに変わるの道理である。しかし、茶に変わることで赤い糸への愛おしさがなお増すのも事実。

振り向けば団塊ばかり上り坂 泰光

戦争直後の団塊世代は一学年二百数十万人、後期高齢の坂を団塊になって上

っている。今や出生数は三分の一以下に。団塊世代は世の中への恩返しも考えなくちゃあ、などと思う。

だからねと言いつけて我を通すカンナ

誰とは言わないが、「だからね」が口癖の政治家。「だからねと言つて後から考える」のかな、とチクツと刺す。

古希過ぎて私の知らない我見つけ 幸子

むかし、大学案内の冊子で「人間はどう生きて来たかを知り、自分はどうか生きるか」という言葉を読んだ。世界を知る事と自分を見つける事、それが学ぶ事だと言うのだ。人はきつと百歳を越えても学び続ける。

ふる里へ心が躍る五連休 千恵

ふる里で待つ祖父母や父母、また友がいる。帰って行く子や孫や友がいる。どんなにかうれしいひと時を共にしたことでしよう。

草むらにくわを打ち込む虫踊る みずえ

冬を卵で過ごした小さな虫たちが草むら を飛び跳ねる季節が来た。畑仕事の日常やその合間の暮らしぶりを詠ってさわやか。

ありがと何度聞いてもいい響き 正彦
ありがとねその一言で気が晴れる 笑美
内藤凡柳先生も詠う。「心の灯ともす 日本語あたたかし」。

この歳になれば意地などぶらぶら廣子

「ぶらぶら」が新鮮。堅物と思つていた知人もうたう。

八十三歳やつとちやらちやらできそ
うだ

令和の世一揆も起こる米の乱 浜子

パンや麺主食を愛する米不足 千恵
早場米値上げ知らずに伸びている 季生

稲作業今年は特に力入れ 久二天
休耕田んぼはあるが米不足 洋治

米不足 世が世であればムシロ旗
である。 ひろむ

◇以下は12ページの下段に掲載しています。